

主 題：あなたは愛されている

聖書箇所：ルカの福音書 19章10節

新約聖書ルカ19：1をお開きください。

ここにあるひとりの人の救いが記されています。その出来事をご一緒に見ていきたいと思えます。

### ルカ19：1-10

- 1 それからイエスは、エリコにはいて、町をお通りになった。
- 2 ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。
- 3 彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見るができなかった。
- 4 それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。
- 5 イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」
- 6 ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。
- 7 これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた。」と言ってつぶやいた。
- 8 ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がかまし取った物は、四倍にして返します。」
- 9 イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」
- 10 人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

現在のエリコという町はエルサレムから北東に約26キロほど進んだところにあります。イエス様がこの町を訪れました。もちろん主の周りにはいつものように群衆が取り囲んでいました。このエリコの町にザアカイというひとりの「取税人」が住んでいたと聖書は教えます。彼は自分たちの町に主イエス・キリストがお見えになったことを聞き、何とかひと目でも主を拝見したいという思いを持って、いちじく桑の木に登って主が通り過ぎる様子を眺めていたことが今の箇所記されていました。なぜ木に登らなければいけなかったのかと言うと、記されていたように背が低かったからです。主がその木の下を通って行かれる時に不思議なことが起こります。いちじく桑というのは我々は余り見たことがありませんが、我々が想像するいちじくの木ではなくて、かなり幹のしっかりとした大きな木です。そこに人々は十分登ることができます。このみことばが教えるように、ザアカイはそこに登っていたのです。ちょうどイエス・キリストが自分の前を通り過ぎようとしていた時、主は「上を見上げて彼に言われた。『ザアカイ。急いで降りて来なさい。』と。恐らく彼は面識のない主から自分の名前が呼ばれたことを聞いて大変驚いたでしょう。なぜ私の名前を知っているのだろうと当惑したと思えます。というのも、このエリコの町において彼には友人がかなり少なかったのです。

なぜかと言うと、彼だけでなく、「取税人」たちというのはローマのために税金を集め、群衆を苦しめる人々でした。ですから彼らのことを愛することはなく、どちらかと言うと裏切り者といった悪いことばを使ってののしっていました。彼らはユダヤ人の社会から阻害され、実際に何かをすれば同業者としかできない、そのような状態にあったのです。7節には「あの方は罪人のところに行っ」と、この町の人々はザアカイのことを「罪人」と呼んでいます。この「罪人」ということばは、我々なかなか耳にすることのないことばですが、このことばは律法を守ることに全く無関心な人、神に対して不敬虔な人のことを指します。ユダヤ人であれば、神が与えた律法を厳格に守るようにと教えられてきたのですが、彼らは特にそういったことに関しては無関心でした。まさにその生き方を見ていると、神に対して全く畏敬の念がない。そこで彼らのことを「罪人」と呼んだのです。確かにそれもそのはずです。「取税人」は税を徴収する時にそれぞれが自分の私腹を肥やすために不正に税を扱っていた。バプテスマのヨハネがバプテスマを授けていた時に、取税人たちが自分たちの罪を悔い改めてヨハネのもとに行った様子がルカ3章に出てくるのですが、彼らはヨハネに「先生。私たちはどうすればよいのでしょうか。」と言います。そうするとヨハネは彼らに「決められたもの以上には、何も取り立ててはいけ」と教えます。なぜこんなことを言ったかと言うと、取税人たちは決められた以上のものを取り立てて、不正を働いていたのです。ですから「あの方は罪人のところに行」かれたと群衆が言ったのも無理はありません。

さて、このザアカイという人物はただの「取税人」でなかったことが書かれています。2節に「彼は取税人のかしら」とであると書かれています。こういった表現は新約聖書の中でここにしか出てきません。彼はその地域の数多くの取税人を統括する地位にいる特別な存在、今で言えば、財務長官のような税に関する責任者だったのです。ですから一般の取税人は集めた税金の何%かを彼に支払う義務があり

ましたから、2節にあるように彼が「金持ちであった」というのはそういうことなのです。そうやって彼自身の地位を悪用して、いろいろと私腹を肥やしていたのです。この「ザアカイ」という名前には、「義人」や「きよい人」という意味がありますが、悲しいことに彼はそのように生きていなかったのです。そんな人物に、主イエス・キリストは「急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」と言われるのです。ザアカイが大変喜んだことが書かれています。私たちはこの出来事を通して何を教えられるかという、彼はこの町のすべての人から憎まれていたかもしれないけれども、主は彼を愛しておられたということです。たとえ人々から憎まれていようと、主はすべての人を愛してくださっている。ひょっとしたら私は神に愛される価値がない、資格がないと思っておられる方がいるかもしれない。でも聖書は私たちに神はあなたを愛してくださっているということを教えるのです。このように町じゅうの人々から憎まれていたザアカイに対して主は彼を愛していることを明らかにされたのです。

今から私たちはこの神の愛について、そしてこのザアカイを救いへと導かれた、その救いについてこの箇所が私たちに教えてくれることをご一緒に見ていきたいと思います。

## 1. 神の愛

どんなふうに主の愛が示されているかと言うと、神ご自身がザアカイに関心を示したのです。先ほどもお話ししたように、まさかザアカイは自分の名前が呼ばれるとは思っていませんでした。群衆とともに移動しているイエスが、自分の前を通り過ぎようとした時に、「ザアカイ」と呼んでくださった。しかもこの後少し見ますけれども、「あなたの家に泊まることにしてあるから」と。主はこのザアカイの必要をちゃんと知っておられたのです。ザアカイがそれを説明したわけではありません。どんなことを彼自身の心に抱いているのか、どんな思いを彼自身が抱えているのか、どんな悩みがあるのか、ひょっとしたら孤独だったかもしれない。人生に希望を見出せないでいたかもしれない。でも神の前にその説明をする必要はなかったのです。神はちゃんとそのことをご存じで、あえてザアカイのために時間を取られるのです。我々は聖書の中で聖書の教える神とはどんなお方であるかを知ることができます。私たちが考える神というのは、我々がいろいろと説明をしなければならぬ存在であったりします。ですから多くの人たちはいろいろな問題や自分の抱える苦しみを一生懸命神に説明しようとする。聖書の教える神はそんな必要がないことを我々に教えてくれます。

例えば過ぎ越しの祭りに、イエス様がエルサレムに行かれた時に主イエス・キリストがなさったいろいろな奇跡を見て多くの人々がイエスを信じたことが書かれていました。ところが主は「ご自身を彼らにお任せにならなかった」とあります。つまり彼らは信じたと言うけれども、イエスは彼らのことを信じなかった。なぜかと言うと、「イエスはすべての人を知っておられたからであ」と。「また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかった。」（ヨハネ 2：24-25）、つまり誰かの説明を聞いてその人を知るのではない、だれの説明を受けなくても主はひとりひとりのことを知っておられると。これが神です。あなたが説明する前から、神はあなたのすべてのことをご存じです。あなたが何をしてきたのか、何を口から出してきたのか、何をあなたが思い描いていたのか、何を想像していたのか、心の隅々に至るまですべてのことを知っておられるのが神です。神の前にはすべてが裸であると聖書が言うように、神の前で隠しおおせることは何一つない。それが聖書の教える神であり、あなたを造られた生きて働いておられるまことの神です。

ですから主がたまたまエリコの町にやって来て、そこで偶然ザアカイを見つけたのではありませんでした。主は目的を持ってこの町にやって来て、ザアカイに会うのです。神様が関心を持ってくださっているのです。既にイエス様をお信じになった皆さん、すばらしい祝福ではないですか？全知全能のすべてをお造りになったまこと唯一の神があなたに関心を払ってくださっていると。60億以上いるこの世界にあって、あなたのことに関心を持ってくださっている。そんな神があなたを愛してくださっている。このザアカイを愛していることを主は彼に教えて行かれます。5節の「きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから」の「してある」という動詞はこんな意味があることばです。「それが必要である」とか「それはなくてはならない」とか、またある辞書では「ある目的を達成するために～する必要がある」とか「しなければならない」、「ある目的を達成するために何かをする必要がある、しなければならない」。つまりこのみことばが私たちに教えてくれるのは、イエス様はザアカイに会うためにこの町を訪れたのです。もっと言えばザアカイを救いへと導くために、イエス様は今晚あえて彼の家に泊まることにしたと言うのです。

## 2. 救い

神様はこのザアカイに対してただ関心を持っただけではない。主は彼を救いへと導くために喜んで時間を取ってくださった。そうしてあなたも私も救いにあずかったということです。偶然の出来事ではなく、主ご自身がそのように定めて、そのように行動されたのです。今私たちはこうしてイエス・キリス

トの降誕を喜び、感謝をしています。なぜかという私たちはこの救いにあずかったからです。でも私たち信仰者が覚えなければいけないのは、この救いにあずかる資格は私たちのうちに全くなかったことです。神があなたに関心を持ってくださり、神があなたを愛してくださり、そして神があなたのためにこのザアカイと同じように時間を取って救いへと導いてくださった。すべて神のわざであったと。主が彼を選び、救いへと導いてくださったのです。そして同じように、あなたも私もこの救いへと導かれたのです。

### 1) 「人の子」：救世主による

この救いについて、8-10節に出て来るのですが、特に10節を見ると「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」と記されています。「人の子」というのは約束の救世主を指しています。旧約に通じていた彼らは、この「人の子」ということばを聞くとダニエル書のみことばをすぐに思い浮かべるのです。ダニエル7：13に「人の子のような方が天の雲に乗って来」ることを約束していました。ですからこうして「人の子」ということばを使うことによって、主イエス・キリストご自身があの約束されていた救世主だということを明らかにしたのです。彼は生まれてから救世主になったのではないのです。彼は救世主としてこの世に来られたのです。彼は立派な人間だったからみんなが救世主と呼んだのではないのです。彼は救世主として生まれ、私たち罪人のために救いを成し遂げてくださったのです。そしてこの方はもう既にこの世に来られ、その方の誕生を我々は今も祝い続けているのです。

### 2) 「失われた人を」

「人の子」が来られたことは歴史上の事実です。では何のためにこの方がお見えになったのか、その目的がこの中に記されています。「失われた人を捜して救うため」だと。それがイエス・キリストがこの世にお見えになった目的だと言うのです。この「失われた人」ということばは余りピンと来ません。実はこのことばを聖書の中から見て行くと、日本語では「殺す」とか「滅ぼす」、「いのちを失う」、また「死ぬ」、「なくする」、「いなくなる」と訳されています。ヨハネの福音書の中にはこのことばが10回出てきますが、そのうちの5回は「滅びる」と訳されています。3回は「失う」、2回は「なくなる」とか「むだになる」と訳されています。このルカの福音書では27回もこのことばが出てきます。「だめになる」と訳されているのが1回、ちょうどあの古い皮袋に新しいぶどう酒を入れては皮袋がだめになってしまうという箇所が使われています。また「殺そう」というのが2回出てきます。「いなくなった」が4回、「死にそう」というのが3回、ちょうどペテロが湖の上でおぼれて死にそうになった時に使われています。「なくした」というのが3回、「失う」というのが8回、そして「滅びる」というのが6回出て来ます。1ページ戻ってルカ17：27にそのように訳されている箇所があります。「ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついたりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。」、この「滅ぼして」ということばが「失われた」と同じことばです。同じルカ17：29「ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。」の「滅ぼして」もそうです。特にこの17章では、この「失われた」というのがどういう意味で使われているのかを我々知ることができます。

主が言われたことは、このザアカイが、そしてこの世の人々がどのような運命をたどっているのかを明らかにしたのです。なぜノアの時代にノアとその家族を除いてすべての人間が滅ぼされたのかです。ソドムとゴモラの町でロトとその娘以外の人たちが滅ぼされたのはどうしてだったのか——。その理由を知ることによって主が何をお話になろうとしていたのかがわかります。彼らが滅びたのは、その人々の罪です。創世記の中ではちょうどノアの洪水の起こる前にどのような社会情勢であったかが教えられています。「地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」（創世記6：5）と。想像できますよね。その当時の人々は神を喜ばせることなど誰も考えていない。どうしたら自分の欲を満たすことができるのか、どうしたら自分を満足させることができるのか、そんなことしか考えていない。みんな神のことを考えていない。ソドムとゴモラの時も同じでした。自分たちは自分たちの肉欲をどうしたら満たすことができるか、性的な不道徳、同性愛者がたくさんいたことも確かに聖書の中に記されています。神を愛して、神を信じて、神に従うのではなくて、人々が神に背いて自分たちの快樂のままに歩んでいる姿、それがその当時の社会だったのです。そして神はそのような社会をそのような人々をさばかれた様子が書かれています。

イエス様がこの19：10で「失われた人を」と言った時に、まさに彼らと同じように、今滅びに向かっている人たち、永遠の地獄に向かっている人たちのことです。それもそのはず、私たちは生まれながらに私たちの創造主を愛することも、その方を信じることも、その方に従っていくこともしませんでした。私たちは自分のやりたいことをして、自分の好きなように生き、そして自分が楽しめばそれでいいと思って生きてきたのです。創造主なる神がいることを知っていながら、私たちはその神を神としてあがめることもしない。ひとりひとは自分の人生は自分のものだと言って、生きている間、どう自分

を楽しませるのか、満足させるのか、そのことしか考えずに我々は生きてきたと。ですから神が言われていることは、悲しいことにこの世のすべての人々は生まれながらに神に逆らう者であるがゆえに永遠の滅びに向かっているということです。ですから「失われた人」なのです。永遠の滅びに向かう人々、神のさばきを受ける人々であると。これはその当時の人々だけではない。今の私たちも同じです。当時の世の中に比べて今の世の中は神を敬う人があふれているのでしょうか？今の私たちの周りを見た時に、恐らくこの当時よりもひどい状態になっていると。私たちが心して聞かなければならないことは神は警告されているということです。この世の罪に対して必ず神のさばきが下るとということです。

### 3) 「捜して」

イエス様がザアカイを訪問した時に、ザアカイがどんな人物であるかは十分ご存じでした。名前だけでなく彼のことはすべて知っていた。彼に何が必要なのかも知っておられたので、ここにあるように、イエス様はその家に泊まってこのザアカイを救いへと導いていかれた。それが彼に必要であることをイエス様はご存じだったからです。ですからこの後10節「失われた人を捜して救うために」と。神に逆らう選択をしてそのように生きてきたのは私たちなのです。でも神はそんな私たちを捜してくださった。

この「捜す」ということばは、マタイ18章でイエス様がされる100匹の羊を持っている人の話にも出てきます。100匹の中の1匹が迷い出たとしたら、「その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。」(マタイ18:12)、ここに出てきています。羊飼いは100匹いた羊の中の1匹がいなくなったけれども、99匹いるからまあいいかとは思わないと。迷い出てしまったその1匹を捜すのだと。そうして神が神に逆らっている私たち罪人に対してどのような思いを抱いてくださっているのかを教えてください。ちょうど羊飼いが迷い出た羊を探すように、神に背を向けて生きている罪人を捜してください。聖書の教える神様がどれほどあなたのことを愛してくださっているか。神ご自身があなたに対して、もうこれまで、十分だとあなたに背を向けてもおかしくないのです。でも神は「失われた人を捜して」くださっている。

### 4) 「救うため」

そして「救う」と続きます。私たちが受けるべきさばきから、永遠の滅びから神は私たちを救い出してくれる。あなたの罪がどんなに大きく、醜く、汚れていても、主はあなたのすべての罪を赦してください。なぜなら「人の子」、約束されていた救世主イエスは滅びに至って当然の人を捜して、その人を救うために来てくださった。あなたをその罪から、その滅びから救い出すために主はわざわざ来てくださったのです。だから私たちはこの方の誕生を心から感謝し、祝うのです。あなたや私に最も必要な救いをもたらしてください。救い主が来てくださったのです。名前と呼ばれたザアカイ、彼はイエスを自分の家に迎えます。そして、彼はこのイエス・キリストを心から信じるのです。なぜそれがわかるのか、9節にそれが記されています。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」と。イエス様が何を言われたのか——。「アブラハムの子」、民族的な話をしているのではありません。ここで言っているのは、アブラハムにならって神を信じて救われた人々の話です。

### ◎ アブラハム

パウロは、ローマ人の手紙の中で、人間がいかに神に逆らい続けているのかを教えてください。人間は神がいることを知っていながら、創造主なる神様には従いたくない。先ほどからお話ししているように、私たちは自分の好きなように生きていきたいからです。それを邪魔するのは創造主なる神です。なぜなら創造主を認めることはその方に従うことを認めてしまうことになるからです。そんなことをしたくないのです。ですから私たちは自由に生きていきたい、好きに生きていきたい、そのために一番厄介なのは、服従を要求する創造主です。でも人間は神がいることを知っているから、いろいろな神々を作り出します。私たちの周りには神と名のついたものが山ほどいます。でもそれは創造主ではない。かつての偉人であったり、我々の先祖であったり、動物であったり、人間が作ったものであったりと。聖書が言います。人間が作ったもの、目があっても見ることはできない。耳があっても聞くことができない。手があっても助けることも救うこともできない。そんなものに頼んであなたは何をしようとするのでしょうか。この世にはすべてをお造りになった唯一まことの神がおられるのです。ですからこのみことばを見るならば、神があなたに背を向けているのではない。あなたが神に背を向けているのです。神は「失われた人を捜して救」おうとしてくださった。でもあなたが神に背を向けて、必要ないと言い続けているのです。

その罪の話をした後、パウロは、アブラハムというユダヤ人たちが最も尊敬する人物のひとりを挙げて、どうやって彼が救いにあずかったかの説明をします。ローマ4章に出てきますが、「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」とあります。「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」、ローマ4:3、5です。「義と認め」られる、つまり神が罪を赦してください。そのために私たちはどんないい働きをしたらいいのか、

どんな行いを継続したらいいのか——。聖書はどんな行いによっても罪の赦しを得ることはないことを教えています。ではどうしたら私たちは救いにあずかるのか——。アブラハムと同じです、神を信じたのです。みことばが言うように「何の働きもない者」、つまりどんなに努力をしても神が要求する完全な働きができない存在、それがあなたであり私です。志はいいかもしれない、決心はいいかもしれない。でも実際に私たちはどんなに努力をしても神が要求している正しさ、完全さ、きよさに達することはないのです。つまり、私たちがどんなに心を入れ替えて頑張ってもそれは神を満足させるものではないということです。何の働きもない者が、不敬虔な者、神に背き、神に逆らってきた私たちを義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰によって義とされる、これが神が私たちに教えてくださった救いなのです。あなたの行いではない、あなたの信仰心ではない。宗教心に熱心だから神が救ってくれるのではない。

約2000年前にこの世にお生まれくださった約束の救世主、その方はみずから進んであなたのすべての罪を負って十字架で身代わりとなって死んでくださった。このイエス・キリストの身代わりの死によって、この方を信じるすべての人が完全に永遠に罪から解放され、救われるのです。イエス・キリストは救い主になったのではないのです。救い主なのです。救うために来てくださった。そのように記されていました。「人の子は、失われた人を捜して救うために来たの」だと。あなたや私のような者を救うためにイエス様は来てくださった。そしてイエス様はただことばで言っただけではない。イエス様はことばで言ってきたことが真実であることを証明するために敢然とその死からよみがえってくださった。今も生きておられる、このイエス・キリストの復活がイエス・キリストが言われていたことすべてが真実であることを証明してくださったのです。彼は救い主であり、そして彼を信じる信仰によってすべての罪人はその罪を赦していただけるのです。

先ほどもお話したように、この聖書の箇所は私たちにこれは神様があなたや私のためにどんな働きをなして下さっているかを教えてくださっています。「人の子」イエス・キリストは永遠の地獄に向かっていたあなたや私を捜して救うために来てくださった。神があなたを愛してくださった。神があなたを救おうとしてくださったにもかかわらず私たちはその方に逆らい続けることを選択し続けているのです。救い主はもう来られたのです。あなたのすべての罪が赦される、その救いは完成しているのです。それでいてあなたはその救い主に背を向け続けているというのが悲しい現実です。聖書は「悟りのある人はいない。神を求める人はいない。」（ローマ3：11）と言います。だれひとりとして神を求めない。神様なんか必要ではないと思って自分の知恵や力に頼って生きている。その人生がもたらすものは永遠の滅びです。神に逆らい続けている者たちが自分の身に招くことは永遠の滅びです。

皆さん、今の社会を我々が見る時に、この社会はキリストを廃絶しようとしています。町に出るとまだクリスマスの賛美歌がいろいろと流れています。よく耳をすませて聞いてみると、救い主が来られたということを歌っています。今の世の中はクリスマスをお祝いしようとしませんが、イエス・キリストの誕生を感謝してお祝いしようとはしません。クリスマスとはパーティをする時間です。楽しく過ごす時間です。何を食べるか、どこに行くかに人々の関心は向けられています。クリスマスからキリストを除いたのです。悲しい悲劇です。なぜクリスマスを祝っているのか——。なぜイエス・キリストの降誕を私たちは感謝するのか——。それはこの方が私たちに救うために来てくださった、この方によって私たちのすべての罪は赦されて、我々は新しく生まれ変わることができる。あなたや私にとっての唯一の希望なのです。立派な宗教家は山ほどいたでしょう。すばらしい教を説く人はいっぱいいるでしょう。しかし、あなたや私の罪を負って十字架で死んでくださったのはこの方だけです。彼こそが約束の救世主です。でも人々は彼を信じようとしない。みことばはこう言っています。「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」（ローマ3：18）と。だれも神を恐れていない。でも必ずその誤った選択を後悔する時が来ます。神に逆らい続けるならば、神がその人にふさわしいさばきをお下しになる。あのノアの洪水がそうだったのです。ソドムとゴモラの町が滅びたのはそうだったのです。神の救いを人々が拒み、神を恐れることなく神に背き続けたゆえです。あなたはそんな歩みをしておられませんか？私たちはこのクリスマスをこうして喜ぶのは、あなたや私を救ってくださる救い主が来られたからです。あなたも私も罪の赦しをいただいて、私たちは生まれ変わって永遠の滅びではなくて、永遠のいのちに至ることが可能となったのです。

### 3. 救われたザアカイ：神を喜ばせたいという新しい心が与えられる

このザアカイが救いにあずかった証拠、そのことをこのみことばが私たちに教えてくれています。人々はイエス・キリストがザアカイの家に行ったことを非難しました。そして恐らくその後ザアカイにどれだけの時間を費やされたのかわかりませんが、8節「ところがザアカイは立って、主に言った。『主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。』」と。ザアカイは今まで自分は悪事を働いてきました。そのことを私は後悔し

て、そして私はこれから正しいことを行っていきたいと。というのは、律法の中には、あなたがかすめたものとか、脅迫してゆすり取ったもの、自分に託された預かりもの、見つけた落とし物、あるいはそれについて偽って誓ったもの全部を、それが発覚したら返さなければいけないとあります。元のを償い、またこれに五分の一を加えなければいけない。これが律法の教えです。レビ記6章に出てきます。誰かからだまし取ったら、そのだまし取ったものはそっくりそのまま返すのだけど、それに五分の一をプラスして返しなさい。これが律法です。ザアカイがしたことは、だまし取ったものは四倍にして返す。彼はただ律法の教えを守ろうとしたのではなく、彼は神が喜ばれることをしたかったのです。救われていると思っ込んでいるだけの偽りの救いと神が本当に救ってくださる救いとは結果によって違いがわかるのです。救われていると思っ込んでいるだけの人は生活は変わりません。でも神によって救われた人は今我々が見ているように、神によって生活が変わるのです。

もちろん皆さんこう言うかもしれない。私はイエス様を信じた。でも私の生活を振り返ってみたら、同じようなことを繰り返して余り変わっていないと。恐らくその証を聞いたら私は違うと言っ切れる人はどれだけいるでしょう。みんな同じです。みんな神が喜ばれることをしたいと思っ込んでいるけれども、実際はできていません。神を喜ばせたいと思っ込んでいるながら神を悲しませることが多いではないですか。では私は救われていないのか——。救いというのは神はあなたに新しい心を下さった。どんな心か——。神を喜ばせたいという今まで持っていなかった思いを持って生きる者になったのです。神が望むような生き方を100%できないような私たちです。でも救われる前と救われる後、何が変わったのか、私の心の中にはこの神に感謝し、この神を喜ばせていきたいという新しい思いが与えられた。それは神があなたに新しい心を下さったからです。神があなたを救ってくださったからです。ザアカイは誰かから言われたことをしゅしゅやっつたのではない。彼は新しい心をいただき、神に喜んでいただきたいとして自分の今までの不正を正したのです。もう私はそのような罪を犯したくないと。そして私は神に喜ばれることをしたいと。この行為がそのことを明らかにしているのです。この行為によって救われたのではない。でもこの行為は彼が救いにあずかったことを明らかにしたのです。ですから「きょう、救いがこの家に来ました。」、彼もアブラハムと同じように神を信じた。そして救いにあずかったのです。

「人の子は、失われた人を捜して救うために来た」と。この「失われた」ということばは、いろいろな意味があると最初にお話ししました。このことばはルカの福音書15章の中で放蕩息子のところでも使われています。二人の息子がいて、下の息子が父親に対して生前贈与してくれと、財産を分けてくれと言っつのです。彼はその財産をもらって、町へ出て放蕩の限りを尽くします。全部の財産を使い果たした後、俺は何をしているのだと、彼は我に返るのです。彼は自分の罪を悔い改めて父のところに戻って赦してもらおうとするのです。ひとりの息子としてではなく、ひとりの雇い人として雇ってもらおうと。もちろん父親が私を拒むこともできる。そのような思いを持っつて彼が自分の家に向かいかけた時、父親が彼を見つっつて、彼を迎えてくれた。その時にこの父親はこう言っつのです「この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっつていたのが見つっつたのだから。」（ルカ15：24）と。同じことばです。主は神に逆らい続っつているあなたを救っつてくださるのです。神に背を向けて永遠の滅びに向かっつていたあなたを救っつてくださるのです。そのために、人の子であるイエス様が来っつてくださった。救いは備えられました。この救いにあずかることができるのです。神に逆らうことをやめることです。そこには何の益もない。それは神に対する大きな罪です。今あなたの罪を心から悔い改めて、イエス・キリストが備えっつてくださった救いを心からいただくことです。その時にこのザアカイと同じようにあなたもこの救いにあずかることができます。

このクリスマス、主イエス・キリストの降誕を記念してお祝いする時に、心から主の御降誕を感謝し、この主が備えっつてくださった救いをご自分のものとしてあなたがお受けになることを心からお勧めします。きょうがあなたにとって救いの日となることを心から願っついます。